

# トヨタ財団レポート

## THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

ISSN 0389-1984

東京都新宿区西新宿2丁目1番1号

新宿三井ビル37F(〒160)

TEL. (03)344-1701~3

Dec. 1984 No.30

### 10年目を迎えたトヨタ財団

#### 記念パーティーと記念シンポジウムを開催

昭和49年10月15日、トヨタ財団は総理府の設立許可を得て誕生した。以来、研究助成、研究コンクール、国際助成、「隣人をよく知ろう」プログラムなど、様々な助成活動を展開してきたが、これらの活動を生み出し、発展させ得た背景には、数多くの方々から親身のご指導や熱心なはげましをいただいたことが大きな力となっている。

財団ではそのようなお力添えに対する感謝の気持をこめて、去る10月17日(木)に東京新宿の京王プラザホテルで、記念パーティーを開催した(写真)。経済界、学界、財団界など様々の分野から、また外国の財団、大使館関係などから230名にのぼるの方々のご出席をいただき、また多くの祝電も頂戴した。

ひき続き18日(木)、19日(金)の両日は、記念行事のひとつとして国際シンポジウムを開催した。テーマは「これからの民間助成財団」。アメリカやヨーロッパ、東南アジア



### 第10回助成金贈呈式

10月17日(木)午後1時より、10周年記念パーティーに先立ち、1984(昭和59)年度のトヨタ財団助成金贈呈式が京王プラザホテルにおいて行われた。助成を受けられる方々、財団関係の方々など多数のご出席をいただいた。豊田英二理事長の挨拶、加藤一郎研究助成選考委員長の選考経過報告、浅田孝研究コンクール選考委員長の選考経過報告、林雄二郎専務理事の10周年記念特別助成選考経過報告の後、理事長より各助成の代表者に助成金贈呈書が手渡された。来賓として総理府の内閣総理大臣官房管

### 目次

- ◆多文化社会への途…………… 2
- ◆研究報告会のご案内・他…………… 3
- ◆10周年記念国際シンポジウムから…………… 4
- ◆災害対策に関する国際会議に参加して…………… 6
- ◆第2回研究コンクール報告会・他…………… 7
- ◆近刊書紹介…………… 8

諸国からも関係者をお招きし、熱のこもった報告と討論が展開された(写真下、P.4参照)。今後の財団活動の発展に何らかの役割を果し得ればと願っている。ご出席・ご協力いただいた皆様に改めて御礼申しあげたい。

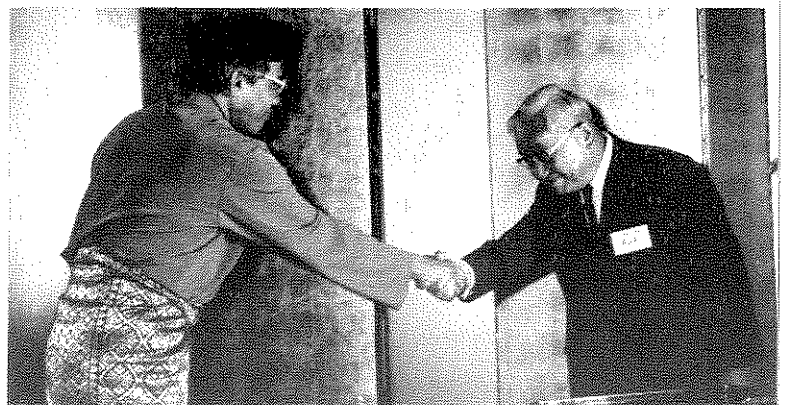


### 第2回研究コンクール 2年間の研究成果を発表

第2回研究コンクール“身近な環境をみつめよう”は、1981年の10月に公募を開始して以来、既に3年が経過した。去る11月25日(日)には東京港区六本木の国際文化会館において、研究奨励賞受賞チームによる2年間にわたる研究の最終的な成果報告が行われた。(P.7参照)

理室長藤田康夫氏よりご挨拶をいただいた。

(写真は、10周年特別助成の1つ、マレーシア図書館パイロット・プロジェクト代表ノア・アザム氏と握手を交わす理事長)





多文化社会への途 —本年度研究助成から—

研究助成部門 プログラム オフィサー 山岡義典

◎顕著になった国際性

今年度の研究助成の全体的な特徴については、すでに前号のレポートで加藤一郎委員長の報告が紹介されているが、今回は国際性というテーマに絞って少し具体的に考えてみたい。

特定課題を除く今年度の研究助成採択件数は67件であるが、これらのうちテーマや研究体制など何らかの点で国際性を有するものをピック・アップしてみると42件にものぼる。これは今年度の顕著な特徴であろう。その内訳は次のようになっている。

- I 日本文化と異文化との接触・交流に関する研究……………18件
- II 日本文化と異文化との比較に関する研究…………… 6件
- III 日本人研究者の行う異文化に関する研究…………… 9件
- IV 外国人研究者の行う日本文化に関する研究…………… 4件
- V 上記以外の国際共同研究… 5件

なお、ここで言う「文化」はその最も広い意味で用いており、人間関係、価値観、社会的な制度・特徴なども含むものと解釈していただきたい。分類Iをさらに細かく分けてみると次のようになる。

- I. a 日系人または海外の日本人やその文化に関するもの……………6件
- I. b 日本における外国人やその文化に関するもの……………5件
- I. c 日本と諸外国との交流・協力に関するもの……………5件
- I. d 外国人の対日観に関するもの……………2件

ここでは特にI. a (異文化の中の日本) とI. b (日本の中の異文化) に焦点をあててその研究の意味を考えてみたい。

◎異文化の中の日本

日系人あるいは海外の日本人がどのよ

うに生き、どのような文化や社会を築いてきたかという研究テーマには、トヨタ財団はこれまでも強い関心をもってきた。先頃アメリカからも研究者を招いて東京で開催された「米国の日系新聞と日本の知識人」と題するシンポジウムや、箕浦康子氏の近著『こどもの異文化体験』（思索社刊、P8参照）などはその成果の一部である。

今年度は、「ブラジルにおける日系人の住環境に関する研究」「ブラジル日系人の心理に関する比較文化的研究」など、ブラジルの日系人に関するテーマが新しく登場した。

アメリカについても「日本人と日系米人の教育に対する価値観・態度に関する比較研究」「仏教文化とキリスト教文化を背景とした親子心中の発生要因のメカニズム分析に関する国際比較研究」の2件が助成の対象となっている。

日系人研究は、異文化接触過程の諸問題の解明にとって重要なだけでなく、日本文化をより深い次元で理解する上でも有意義なものと思われる。特に、一般に「日本的」と言われている諸々の特徴が生得的なものであるのか後天的なものであるのかを知る手掛りとして大きな意味をもとう。また、日本文化と異文化の比較研究における媒介項としても大きな意味があることは、例えば林知己夫氏を中心とする一連の国民性に関する国際比較研究からもうかがえる。

東南アジアの日本人の活動に関係したものは、「ダバオ・フロンティア史—日本人マニラ麻栽培者とバゴボ族との関係を中心として」と「タイにおける日本的経営管理制度の現状とその適用性」の二つの研究がある。異なる文化の中で、日本人はその社会の発展のためにどのような形で関与し得るのか、今後の重要な課題であろう。



この11月11、12日には東京経済大学においてアメリカの日系新聞の発達に関する国際シンポジウムが開催された。

◎日本の中の異文化

日本の文化は異文化を積極的に吸収し、それを同化しながら発達してきた。しかしそこには必ず吸収する側の強い論理が働いており、吸収するものについての厳しい取捨選択が行われてきたように思う。異文化を異文化としてありのままに受け入れて異質なものと共存しながら生きていくという社会を築いてはこなかったように思われる。異なる文化（あるいは民族）がそのアイデンティティを保ちつつ日本の社会でどう生きていくかは今後の重要な課題であろう。

このような課題に関する研究として、「国際結婚児の実態研究—重国籍問題を考えて」「職場集団における文化摩擦と葛藤—便宜置籍船乗組員に関する研究—」「二重文化的状況下の子どもの社会化過程の実証的研究」の三つの研究がある。いずれも国際共同による予備研究であり、総合研究に向けての方法論の確立と着実な準備が期待される。

少し性格は異なるが、「占領政策にともなう地域社会の国際化—東北地方を中心にして—」や「華僑教育の沿革と現状に関する国際比較研究—日本・華南・台湾の華僑学校を中心に—」も日本における異文化の意味を考える研究として興味をひく。

◎多文化社会の創造のために

10月18、19日に開催されたシンポジウム（P4、5参照）の中でウィレム・H. ウェリング氏は「ヨーロッパの民間助成



財団の役割」について報告し、最後に、今日のヨーロッパの財団の最も大きな関心事は「多文化社会」の出現にどう対応するかにある、と発言した。西ヨーロッパにおいてはここ数十年の間に旧植民地などからの移民が急増し、深刻な問題を抱えているという。このことは具体的な状況のちがいはあろうがアメリカにおいても大きな問題ではないかと思う。

日本では今のところヨーロッパやアメリカに見られるような「多文化社会」は出現していない。それに伴う社会的な問題もそれほど顕在化していない。しかし早晚、直面せざるを得ない課題である

## 研究報告会のご案内

### ◆第19回研究報告会

テーマ：「環境学の展望と課題」

日時：1985年1月25日(金)

10:00～17:30

場所：東京都港区六本木 国際文化会館  
プログラム：

10:00～12:10

水環境におけるユスリカの役割

富山医科薬科大学 佐々 学

ハシボソミズナギドリ大量斃死の原因

山階鳥類研究所 黒田長久

不知火海の環境変化—生物と漁業

熊本大学 原田正純

13:10～15:10

スパイクタイヤ車粉塵の環境汚染

北海道大学 山科俊郎

微粉炭フライアッシュの生物影響

産業医科大学 児玉 泰

環境中の変異原物質の危険度・安全度

国立ガンセンター 杉村 隆

15:30～17:30

総合討論「環境問題と環境学の未来像」

司会 国立公衆衛生院 山県登

討論者 東京大学 江上信雄、帝京大学

大井玄、東京大学 鈴木継美、旭川医科

大学 土井陸雄、愛媛大学 立川涼、北

里大学 井村伸正

う。日本人は各地に移り住んで多文化社会の一員となってきているが、日本そのものが多文化の混在する社会になることも遠い先のことではないだろう。それを単に社会の混乱として対処するのではなく、新しい地球社会の実現に向けての重要なワンステップとして理解することが必要である。

異文化の中の日本、日本の中の異文化に関する研究の蓄積は、これまで必ずしも多くはない。しかしこれからの多文化社会の創造のためには欠かせぬ重要なテーマであろう。とりわけ民間助成財団の取り組むべき重要な課題のように思われる。

### ◆第20回研究報告会

テーマ：「もう一つの日本文化」

日時：1985年3月1日(金)

10:00～18:20

場所：東京都港区六本木 国際文化会館  
プログラム：

10:00～12:10

アイヌ文化の伝承と記録

北海学園大学 藤村久和

地神盲僧の語り物伝承

観光文化研究所 村山道宣

南島入墨習俗の調査と記録

読谷村立歴史民俗史料館 名嘉真宜勝

13:10～15:10

かくれ念仏と身分差別

関西大学 谷口修太郎

北海道の開拓と建築

北海道古建築同好会 大滝栄蔵

北アメリカの日系新聞

東京経済大学 田村紀雄

15:30～18:20

記録映画上映

「山に生かされた日々—越後奥三面」

解説： 民族文化映像研究所 姫田忠義

詳しいお問い合わせ、出席のお申し込みは電話にて財団研究助成係までお願い

いたします。(いずれも入場は無料)

## 財団設立10周年にあたって

理事長 豊田英二

(10周年記念シンポ挨拶より抜粋)

(前略) このような対社会活動の実施について、財団をつくらなくても企業みずからが対応できるのではないかという意見もあります。しかし私どもが考えておりますように社会全般の問題に幅広く積極的な対応ということになりますと、企業内で企画し実施するということは、どうしても限界があり、その目的が果せなくなると考えたのであります。

このように広く社会のお役に立つということを考えた場合、企業の枠をこえた発想、行動が必要とされてまいります。たとえば、若い研究者への研究助成のケースですが、それはいわば海のものとも山のものともわからないわけです。またその人材が育つかどうかは10年たってもおそらくわかりません。そのような気の長い話は企業では付合にくいところでもあります。しかし財団活動においてはあたりまえのことで、またその研究の資金が他からうけにくければうけにくいほど、民間助成財団が応援するにふさわしいのであります。100%成功間違いなしというような研究であれば、他から研究費を得るチャンスは充分あるわけであります。

よくひとは東南アジアへ助成をしているのはトヨタの販売戦略にも貢献するといういい方をいたします。しかし財団が助成活動をおこなう場合、そのような発想にたって出来るものでしょうか。(中略) 私どもは国際助成においてはあくまでも相手国の自主性を尊重し、そしてそれが相手国社会にとってどのような貢献をするかを考慮して助成すべきであると考えております。それは一企業という立場をこえた発想のもとにおこなうものであります。そしてこのような活動は国でもなく企業でもなく民間の助成財団であるからこそ出来るという風に考えます。

(以下略)



## 10周年記念国際シンポジウムから

## アメリカ、ヨーロッパ、東南アジア、日本の助成財団関係者集う

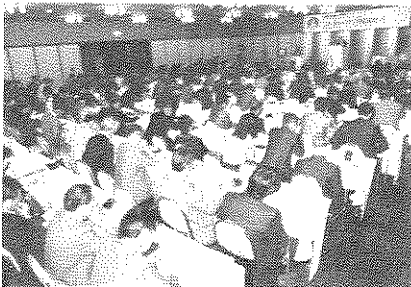
国際部門 プログラム・オフィサー 岩本一恵

民間助成財団とは何をする所か。その事業は政府の補助事業とどこが違うのか。企業の寄附活動とはどこが違うか。民間非営利の他組織の事業とはどこまでが同じで、どこが違うか。また、学者、研究者、専門家、民間非営利の他組織、企業、政府とはどんな協力が可能か。

民間助成財団の活動がより活発になり、数も増加するためにはどうすればよいか。民間助成財団は日本ではかなり古くからあるにもかかわらず、財団の外部環境、内部環境の諸側面についての議論がなされていない。例えば、公益とは何であるか、これに関連する税制の問題、学界や財界と同様な助成財団界の形成や、助成財団に関する資料センターの必要性、財団職員の教育・研修はどう行うべきか、等々。

このような問題意識の下に、トヨタ財団の設立10周年記念国際シンポジウム「これからの民間助成財団」は、10月18日(木)、19日(金)の両日、総理府の後援を得て、京王プラザホテルにて開催された。

民間助成財団の歴史の長いヨーロッパ。民間助成財団が政府の先駆的活動を行い、かなり優遇され、民間非営利セクターに活力を注ぎ込むという役割を果たしており、世界的に見ても民間助成財団がすぐれて重要な位置にあるアメリカ。民間非営利セクターが育ちにくい土壌ではあるが、1970年代より民間助成財団が少しずつ増えてきた日本。日本よりもっと民間非



営利セクターが育ちにくいタイ。州政府が設立した財団が活発な活動をしているマレーシア。これらそれぞれの地域からこの分野に深い知識のある人々をお招きした。

ヨーロッパからはオランダのファン・リア財団のウィレム・ウェリング専務理事、アメリカからは財団職員としての経験もあり、財団のアドバイザー、コンサルタントを長くつとめ、企業の社会的活動のコンサルタントもしながら民間非営利セクターの育成に努力をしてこられたワルデマー・ニールセン氏、タイからはタマサート大学タイ研究所所長で、タイ社会学会会長、社会科学・人文科学教科書作成促進財団理事長でもあるサネー・チャマリク教授、マレーシアからは首相政務秘書官でマレーシア読書促進委員会委員長でもあるモハマッド・ノア・アザム氏をお迎えした。

また、ヨーロッパには、主要な助成財団の専務理事クラスが非公式に情報交換をするハーグ・クラブという集まりがあるが、この会長でヨーロッパ文化財団事務局長のレイモンド・ジョリス氏が自主参加された。前述のウェリング氏はこのハーグ・クラブの創設者の一人で、長い間会長をつとめられたので、ヨーロッパからは助成財団界の二人の実力者がはかからず日本にみえたことになる。アメリカからは丁度、全米財団評議会のトーマス・フォックス国際プログラム部長が、当財団の助成で、日本の助成財団の調査および日米助成財団の情報交流促進のために来日中であつたので、フォックス氏にも参加をいただいた。

日本からは、朝日新聞の斧泰彦論説副主幹、加藤一郎成城学園学園長、加藤幹雄国際文化会館常務理事、鈴木佑司法政大学教授、原ひろ子お茶の水女子大学教

授、藤原房子日本経済新聞記者、また助成財団関係者として、両宮孝子公益法人協会専門委員、田中勇東レ科学振興会事務局長、友野俊平公益法人協会専務理事、三谷誠一三菱銀行国際財団専務理事、望月信彰日本生命財団専務理事に参加をいただいた。

なお、当財団からは、浅田孝理事、天城勲理事、大島正光理事、林雄二郎専務理事が参加した。

230人にのぼる熱心な方々のご出席をいただいた当シンポジウムの内容については、その概要が「公益法人」12月号(公益法人協会<sup>※</sup>)に掲載されているので、詳細はそちらに譲り、このニュース・レターでは、主としてその他のニュースをお伝えしたい。

## ●「アメリカの大型財団」の著者の迫力

当財団は設立10周年記念事業の一環として、ニールセン氏の著書「アメリカの大型財団—企業と社会」(林雄二郎訳、河出書房新社)として翻訳したが、こ



ニールセン氏の本は1960年代の終りまでのアメリカの財団の活動と運営について、そのよい面も悪い面をも、ニールセン氏の個性的な視点から描き出したものである。その後15年間にアメリカの財団活動は非常に改善されたという。氏は今、その続編を執筆中である。ニールセン氏はまた、当財団の10年間を見守り、モラル・サポートを惜しまなかった方だが、会期中ずつと一つ一つのセッションに精神集中をされ、終始、氏の深い哲学に基づく意見を述べられた。各種の質問やコメントに、このように練り上げられ、充分考え尽された答をする人を私はあまり知らない。やはり大変な迫力を感じさせる人であった。氏の講演要旨は次のとおりである。

民間助成財団の助成金は、アメリカの民間非営利セクターに集まる金の2%を



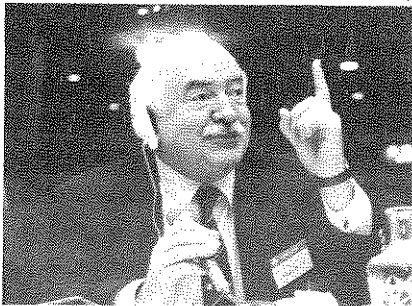
占めるに過ぎない。しかし何故これが特別な意味を持つのかは、財団は民間非営利の立場からの批評眼を持ち得るからなのである。このことが、実験的なプロジェクトを可能にし、多様な試みを応援することで人間的価値を守り、しっかりした民間機関へ助成をすることで公立と私立のバランスをとることを可能にする。すなわち、質、多様性、草の根、長期的視野といった、社会を健全に保つ要素が守られることを意味するのである。

●ヨーロッパからの関心

前述したヨーロッパ助成財団界の二人の実力者は、これまた大変な精神集中度でシンポジウムをフォローし、ある結論に達した。それは閉会後のパーティーで披露されたが、林雄二郎専務理事に対してハーグ・クラブのコレスポンドメンバーとして推薦をするということであった。林専務はこれを受けたのではあるが、この他にも、日本の財団との共同助成の可能性を探りたいという申し入れもあって、ヨーロッパとの距離が今後、少しずつ縮まって行くことが期待されている、という感じを強くした。

また、シンポジウムを通してヨーロッパの代表たちは、助成財団の状況に関しては、ヨーロッパと日本の場合は類似しているという印象を持って、親近感を感じたらしい。

ウェリング氏



●隣国アジア諸国からの助言

助成金を出す側というよりも受けることの方が多いタイとマレーシアの代表は、シンポジウム終了後、次のような意見を



ノア・アザム氏

述べられた。マレーシアのノア・アザム氏は、日本も含めて外国の財団は現地のパートナーをどうやって見つけたらいいのかわかっていないことが多い。パートナーを見つけるには、現地に行き、地方の村落を訪ね、right peopleに会ってから決めるべきである、ということを強調された。

タイのサネー教授は、持てる国が持たざる国に「援助」をするという姿勢ではなく、助成側と助成対象側がパートナーの関係となるべきである、と主張される。外国の助成財団の機能が、近代化の押しつけということから、社会の問題に対してアイデアを分かち合うというパートナーシップを増加させることへと変わってきたのである。したがって今後、外国の財団は、現地の知識人が学術的にも教育的にもたどる変化の傾向を、注意深くフォローするべきである。また、自国内にいる当該国専門家と当該国の学者とを会わせるような努力をすべきであると助言された。



サネー氏

なお、トヨタ財団は、数多くの知人、友人を東南アジアに持ち、これらの人々のモラル・サポートや助言を得ながら助成活動を展開してきたわけだが、たまたまお二人の助言に沿った活動を進めてきたことになる。現地の人々の声に常に耳を傾けながら、活動を推進していくことの重要性は、いくら強調してもしすぎることはないだろう。

●日本からの発言

鈴木佑司教授による国際助成活動の評価研究についての発表は、外国人参加者を始め多くの方々から高い評価を受けた。非常に厳しい評価視点からの研究であっ

たので、ニールセン氏さえも驚かれたが、同時に創造的な視点でもあったので大きな関心をひいた。

雨宮氏、三谷氏、望月氏、林専務の発表は、日本の民間助成財団がかかえている諸問題を明らかにしたため、外国人参加者は、財団設立者あるいは公益活動のための寄附が優遇されることが少ないという、日本の厳しい状況に改めて驚かされたようだった。

日本の民間助成財団の歴史はアメリカの財団と同じく古い古さを持つ（林雄二郎、山岡義典著「日本の財団—その系譜と展望」P.7参照）が、欧米とは異なる社会的・文化的風土でいかに民間助成財団が意義深い活動を展開できるか、そのための提案が望月氏の発表を通して行われ、林専務はそのための哲学として、社会への奉仕というよりも社会への報恩（国への報恩とは異なる）という考え方を提出した。

なお、これからの日本の民間助成財団は、税制の整備に対して関係方面へ働きかける一方、財団界組織の整備、助成活動実績の積み重ね、すぐれた助成プログラムの作成と助成の評価活動、人材の確保と育成、効果的かつ適切な広報活動による社会的認知の浸透等へ向けての努力が必要であることが、このシンポジウムを通してますます明確に認識された。これはこのシンポジウムの少なからぬ成果の一つだったと思う。

(※〒108 東京都港区三田2-14-4三田慶応ビジネス203号 ☎ 03-455-2961)





## 災害対策に関する 国際会議に参加して

防災都市計画研究所 村上處直

このたびトヨタ財団から成果発表助成を得て、インドのニューデリー市で開かれた国際会議CIB/W-73 (International Conference on Natural Hazards Mitigation Research and Practice: Small Buildings and Community Development) に出席し、研究助成を頂いて進めている「災害事例の総合的データ・バンク・システム作成に関する基礎的研究」の成果の一部を発表することができたので会議の様子などを報告する。

**災**害対策に関する研究者や計画者・行政官などによる国際的会議が持たれるようになったのは、おそらく1973年11月にサンフランシスコで開かれた、ニカラグア地震(1972年12月23日)の国際地震工学会(E.E.R.I)の集まりからではなかろうか。当時、会議に参加した時、それまでどちらかと言うと耐震工学的領域が主流であったE.E.R.Iの論文集の内容が、行政的対応も含めてあらゆる領域に広がっていたことに驚かされたものである。その後もこのような会議は何らかの形で続けられてきたが、アメリカのカリフォルニア州で地震防災計画に関する時限立法を実施したことに刺激されて、数多くの研究者や計画者が育ってきたことから、近年急速に活発化し始めている。昨年はメキシコで開かれ、来年はギリシアで開かれる予定である。

**今**回の国際会議は、ニューデリーのMalulana Azad RoadにあるVIGYAN BHAWANという政府の会議場で行われ、開会式は労働建設大臣の出席のもとに行われた。後援はアメリカの国立科学財団(N.S.F.)、インドの労働建設省の国立

建築機構(N.B.O.)、イリノイ大学の建築研究会議(Building Research Council)の三団体であった。

登録された出席者はインド側69名、外国から48名で、関係者を全部入れても200名弱という小規模な国際会議であったが、参加国は、アメリカはもちろんイギリス、中国、オーストラリア、ニュージーランド、トルコ、ギリシア、チリー、ガテマラ、ペルー、メキシコ、ドミニカ共和国、デンマーク、ナイジェリア、日本等と多彩であった。会期は10月8日(月)から11日(木)までの4日間であった。

**会**議の運営は、A) 建築、B) 社会・経済、C) 材料・建設、D) 地域計画・都市計画と大きく4つの分科会に分れ、1日目は全体会議において、それぞれの分科会の概論が代表的出席者からなされ、2日目、3日目は分科会別に進められ、最終日にまとめのための全体会議が持たれ、分科会別のまとめと全体としてのまとめが行われた。結果的にはA)、C) 分科会はマイクロゾーネーションのグループと建築技術のグループに分れて進められたが、B)、D) 分科会は内容的にも人数的にも分けて行うことが効率的でないことから、まとめて進められた。これらの分科会のどれにも自由に出席して良い形式をとったため、興味ある話題の時は大勢集まってくることとなった。

**私**の発表は、3日目の午後のB)、D) 合同分科会で行った。持ち時間は15分ぐらいで短かったが、スライドを使用し、現在実際に作業が始まっている、レーザーディスクへの入力や呼び出し、まだ完成していないが、総合的データ・バンク・システムの全体像や「災害事

例カルテ」、実際の報告書や写真やビデオテープについての報告を行った。またどういところから資料を収集しているか、アメリカなどの外国の資料収集について、どう考えているかを話した。その結果、インド側からきわめて強い関心がよせられ、最終日の全体会議では、分科会のまとめの中でも全体のまとめの中でもトヨタ財団の援助の話とともに再度話題にとり上げられ、インドも何らかの協力関係を持ちたいし、国際的にもユネスコのような機関の援助によってデータ・バンクを完成させるべきだという総括がなされた。

「災害に学ぶ」ということが災害対策を考える上でいかに大切かは言うまでもないが、予想以上に強い関心が寄せられ、会議の合間のコーヒープレイクのたびにほとんどすべての国の人達から英文の資料の請求があった。またインドの研究者からは、実際の災害現場のスライドのコピー、英文の報告書などの要求があった。

日本に帰って程なく、アメリカの参加者からN.S.F.の助成のもとに同じシステムをアメリカ側に構築したいが、詳しい内容を知りたいという手紙が来ている。今回の国際会議の発表の結果、本研究の重要性をますます強く感じると共に、現時点では入力が日本語で行われているが、せめて呼び出すためのリストや、キーワードは英語でも行えるよう修正する必要が生じ、国際的責任の重さを感じている次第である。

10月にニューデリーで開かれた災害対策国際会議







## 第2回研究コンクール「身近な環境をみつめよう」

## 研究報告会を開催—特別賞の決定に向けて—

去る11月25日(日)に東京港区六本木の国際文化会館において、第2回研究コンクール研究奨励賞受賞チームによる2年間にわたる研究の最終的な成果報告会が行われた。

〈地域情報研究会・兵庫〉〈地域のすまい=まちづくりを考える熊谷グループ〉〈環境農学研究会〉〈インフルエンザワクチン効果に関する研究班〉〈小樽のまちづくりを考える会〉の銀賞5チーム、および〈十八鳴浜研究会〉〈子どもの遊びと街研究会三軒茶屋ブロック〉〈青森県自然保護の会「コウモリ保護研究会」〉〈長崎再発見研究会〉の金賞4チームが午前10時から午後5時半までかかってみっちり報告を行った。

今回の報告会では各チームともプレゼンテーションには特に努力のあとが感じ

られる点が印象的だった。この報告会はまた特別賞の選考を兼ねるため、選考委員からの質問はかなり厳しいものがあったが、各チームとの質疑応答はそれだけに緊迫した密度の高いものとなった。

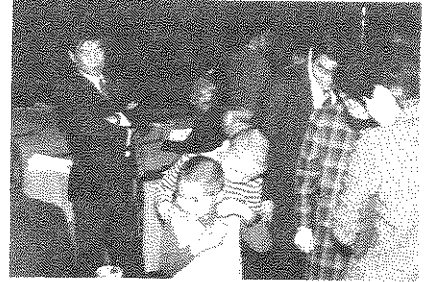
報告の後には、このコンクールの特に金賞4チームの2年間の活動に焦点をあてた映像記録「わたしたちのまち・自然・いのち」が上映された。この作品は、報告書にはあらわれない各チームの人々の姿を映像を通してとらえ、それによってコンクールの趣旨をよりよく理解してもらうために、民族文化映像研究所に製作を依頼していたものである。報告会の後、早くも各チームから地元での上映を行いたいという申し出があったが、財団ではそれに応えるとともに更に来年4月以降は一般にも広くフィルムもしくはVTR

の貸出が行えるよう準備を進めている。

今回の報告会は、気仙沼のチームが全員でマイクロバスで上京したのをはじめ、各チームのメンバー、さらに第3回コンクールで奨励賞として研究をスタートさせたばかりのチームからも参加があり、大変活気あふれたものとなった。懇親会でも選考委員とチームとが一体となって大いに話題がはずんだようである。

これを機にコンクールに参加した方々の間で新たな交流の輪が広がっていくことを期待し、またそうなるよう財団でも努力していきたいと思う。(久須美記)

休憩時間に十八鳴浜研究会の「鳴り砂」を鳴らす三軒茶屋チームの子ども



林雄二郎専務理事が  
ハーグ・クラブのメンバーに

## 「日本の財団」中央公論社から出版

助成財団とは何か。歴史的な視点からその将来像を展望する書「日本の財団—その系譜と展望」が11月25日、中公新書の一冊として発売になった。

当財団の林雄二郎専務理事と研究助成部門の山岡義典プログラム・オフィサーの共著である。

三部構成で、第一部「財団とはなにか」と第三部「これからの財団」を林が執筆し、第二部「日本財団小史」は山岡が執筆した。以下、内容の紹介を「公益法人」Vol. 13 No. 12より抄録する。

——第一部で「第3セクター論」、第3部で「成熟社会論」が展開されている。なぜ第3セクター論かという点、「財団とは第3セクターに属するもの」だからであり、なぜ成熟社会論かという点、現代は「工業社会の成長期から成熟期への転換の過程」にあり、第3セクターの活動

がとりわけ重要な意味をもつ時代だからである。

——ところで、日本の現状をみると、第3セクターの活動は、欧米に比べて極めて低調である。

——著者は、第3セクターの活動の実際的必要と、日本人には日本人のフィランソロビーがあつてよいのではないかとする考えから、日本人に固有の報恩の思想に着目し、われわれには「報恩という考え方のほうがなじみが深いのではなからうか」と述べている。つまり、この思想から、欧米に比べると貧弱ながら現実であり、活発化が望まれる第3セクターの活動の日本型を構想し得るのではないかという見解である。

——なお本書第2部は、齋藤報恩会のほか、森村豊明会—中略—三井報恩会などの戦前の助成財団、またその創立者の人と思想を克明に跡づけており、公益活動関係者には見逃すことのできない内容である。

P.5の記事の中でも紹介したが、このほど当財団の林雄二郎専務理事がヨーロッパ財団界の実力者で構成されるハーグ・クラブに、日本ではもとよりアジアではじめてのコレスポンディング・メンバーとして名を連ねることになった。

このクラブは1971年に、オランダのハーグで設立され、法人ではなく個人をメンバーとしている。定期的に会合を持ち、情報交換や共通の課題についての討論を行っている。12ヶ国の24財団の専務理事がメンバーになっており、例えば、イタリアのオリベッティ財団、フランスのフランス財団、西ドイツのフォルクスワーゲン財団、オランダのファン・リア財団、ポルトガルのグルーベンキアン財団、イギリスのナフィールド財団などがある。現在の会長はヨーロッパ文化財団のジョリス氏である。



## 近刊書紹介

トヨタ財団の助成研究に関連する出版物でこの1年間に刊行されたものをご紹介します。

## 『雲南の照葉樹のもと』

佐々木高明編著

'84.5 日本放送出版協会刊 2200円

本書は、国立民族学博物館のメンバーを中心とする中国西南部少数民族文化学術調査団の報告と、それに関係の深い二篇の論文からなる。調査は1982年10月29日から12月10日までの間に実施されたが、これに財団は「東アジア南部における民族文化の交流と動態の実証的研究」というテーマで1981年度に助成を行った。

タイトルはソフトで口絵写真なども非常に美しいが、内容は「照葉樹林文化論」や稲作のルーツをめぐる、かなり読みごたえのある学術論文集である。

## 『ダウン症児の赤ちゃん体操』

藤田弘子著 '84.8

ブラザー・ジョルダン社刊 2300円

著者は過去20年に亘り、染色体研究を通じて多くのダウン症児とかかわり、早期療育のための方法論を模索してきた。1982年度助成研究「障害児総合援助システム開発のための予備研究」においては、ダウン症児の運動発達里程表に基づく早期療育の客観的なプログラムを作成した。本書は、この成果を豊富な写真とイラストでわかり易く紹介している。ダウン症児をもつ親や病院関係者にひろく読んでいただきたい本である。

## 『子供の異文化体験』

一人格形成過程の心理人類学的研究

箕浦康子著 '84.9 思索社刊 2600円

著者はUCLA大学院に在学中、1979、79年度と2回にわたり研究助成を受け、

ロスアンゼルス在住の日本人家庭を訪問調査し、異文化の中で子供達がどのように人格形成されるかを克明に追跡した。その結果は博士論文として同大学に提出されたが、本書はこれを基に、一般の人々にも解りやすい形でとりまとめられたものである。

## 『暴走族のエスノグラフィー』

—モードの叛乱と文化の呪縛—

佐藤郁哉著 '84.10 新曜社刊 1800円

本書は、1983年度の助成研究「青年の逸脱と非行集団の組織原理を構成するシンボルと儀礼」がもとになっている。

著者は、シカゴ大学大学院に籍を置く若手の研究者である。京都をフィールドに、ある暴走族の現役およびOBのメンバーと接触を続け、「仲間(つれ)」や時には「オッチャン」と呼ばれながらも飽くまで研究者という立場を保ちつつ観察を行った。

暴走族活動に見られる様々な「遊び」を、若者たちが自らの手で生活に一定の秩序と意味を与えていこうとする営みのあらわれとして捉え、その実態を参与観察を主体として、心理学・社会学・文化人類学の観点から検討している。

## 『森林をみる心—「森林と文化」』

国際シンポジウムからの報告

四手井綱英/林知己夫編著

'84.10 共立出版刊 1900円

四手井綱英氏を代表とする森林文化研究会は、1978、79年度の2ヶ年にわたる研究助成で「森林環境に対する住民意識の国際比較に関する研究」を実施し、日本、ドイツ、フランスの人々の森林に対する意識のちがいを明らかにしてきた。この

成果はすでに財団の研究報告書としてまとめられているが、その成果を基に、ドイツとフランスの共同研究者を招聘して日本の各地でシンポジウムを開催した。本書はその記録をまとめたものであり、森林が単なる自然の表現ではなく、それぞれの民族の文化的表現でもあることを改めて知らせてくれる。

## 『パラダイム再考』

中山茂編著

'84.10 ミネルヴァ書房刊 2000円

T.クーンが『科学革命の構造』において「パラダイム」という概念を世に問うたのは1962年のことである。以来この概念は俗用・誤用も含めて様々な分野で用いられるようになってきた。

本書は、『科学革命の構造』を邦訳し、パラダイム概念を日本に紹介した中山茂氏を中心に、柴谷篤弘、村上陽一郎など15人の科学史・科学哲學家各氏が、パラダイムをめぐるそれぞれの観点からその現代的意味を問い直した論文の集成である。その中には、手塚晃氏を代表とする当財団の助成研究「ディシプリンの形成と変容に関する研究」(1979、81年度)における討論の成果も収録されている。

## 編集後記

▼村上處直氏にはご多忙の合間を縫って国際会議の報告を寄稿していただきました。厚く御礼申し上げます。

▼10周年記念シンポの開催に関連して多くの方々から励ましのお便りをいただきました。ご期待に応えるようこれからも一層努力をいたします。

▼今年も残すところあとわずか。この一年やけに短かったような気がします。文明病なのか年のせいなのか考えこんでいます。皆様よいお年をお迎え下さい。

## トヨタ財団レポート No.30

このレポートを継続してご希望の方は、ハガキにて財団までお申し込み下さい。

発行日 1984年12月18日

発行所 財団法人 トヨタ財団

発行人 山口日出夫

編集人 久須美雅昭

印刷 真友工芸株式会社